

日本文学全集

2

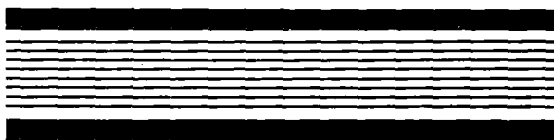
源氏物語
上卷

与謝野晶子訳

河出書房



源氏物語 上巻



カラー版日本文学全集 2

1969 ©

昭和四十二年一月十日 初版発行
昭和四十四年九月三十日 十版発行

定価 七五〇円

訳者 与謝野晶子

発行者 中島隆之

印刷者 草刈龍平

装幀者 亀倉雄策

印刷 中央精版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

同納入 東邦紙業株式会社

クロース 日本クロス工業株式会社

同納入 株式会社小島洋紙店

発行所 株式会社 河出書房新社

電話 東京都千代田区神田小川町三丁目六番地
東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

松 まつ 絵 え 関 せき 蓬 よもぎ 澤 むお 明 あか 須 す 花 はな 櫛 さかき

散 ちる

風 かぜ 合 あわせ 屋 や 生 う 標 しょう 石 いし 磨 ます 里 さと

二七 二二 一九 一六 一三 一〇 〇七 〇四

源氏物語 上卷

桐きり
壺つぼ



紫のかざやく花と日の光思ひあはざる
ことわりもなし
晶子

どの天皇様の御代であつたか、女御とか更衣とかいわれる後宮がおおぜいいた中に、最上の貴族出身ではないが深いご寵愛を得ている人があつた。最初から自分こそはという自信と、親兄弟の勢力にたのむところがあつて宮中にはいった女御たちからは失敬な女としてねたまれた。その人と同等、もしくはそれより地位の低い更衣たちはまして嫉妬の炎を燃やさないわけもなかった。夜の御殿の宿直所からさがる朝、つづいてその人ばかりが召される夜、目に見、耳に聞いてくやしがらせた恨みのせいもあつたか、からだが弱くなって、心細くなつた更衣は多く実家へさがつていがることになると、いよいよ帝はこの人にばかり心をおひかれになるというものがおどきにならない。ご評しようとも、それにご遠慮などというものがおどきにならない。ご聖徳を伝える歴史の上にも暗い影のひとつ残るようなことにもなりかねない状態になつた。高官たちも殿上人たちも困つて、ご覚醒になるのを期しながら、当分は見ぬ顔をしていたいという態度をとるほどのご寵愛ぶりであつた。唐の国でもこの種類の寵姫、楊家の女の出現によつて乱が醸されたなどと陰ではいわれる。今や、この女性が一天下のわざわいだとされるにいたつた。馬嵬の駅がいつ再現される

かもしれない。その人にとっては堪えがたいような苦しい雰囲気の中でも、ただ深いご愛情だけをたよりにして暮らしていた。父の大納言はもう故人であつた。母の未亡人が生れのよい見識のある女で、わが娘を現代に勢力のある派手な家の娘たちにひけをとらせないよき保護者たりえた。それでも大官の後援者をもたぬ更衣は、何かの場合にいつも心細い思いをするようだった。

前生の縁が深かつたか、またもないような美しい皇子までがこの人からお生れになつた。寵姫を母とした御子を早くごらんになりたいと思召しから、正規の日数がたつとすぐに更衣母子を宮中へお招きになつた。小皇子は、いかなる美なるものよりも美しい顔をしておいでになつた。帝の第一皇子は右大臣の娘の女御からお生れになつて、重い外戚が背景になつていて、疑いもない未来の皇太子として世の人は尊敬をささげているが、第二の皇子の美貌にならぶことがおどきにならぬため、それは皇家の長子としてだいじにあそばされ、これはご自身の愛子として、ひじょうにだいじがっておいでになつた。更衣ははじめから普通の朝廷の女官として奉仕するほどの軽い身分ではなかつた。ただ、お愛しになるあまりに、その人自身は最高の貴女といつてよいほどのりっぱな女ではあつたが、しじゅうおそばへお置きになろうとまず先にこの人を常の御殿へお呼びになり、またある時はお引きとめになつて更衣が夜の御殿から朝の退出ができず、そのまま昼も侍しているようなことになつたりして、やや軽いふうにも見られたのが、皇子のお生れになつて以後、目に立つて重々しくお扱いになつたから、東宮にも、どうかすればこの皇子をお立てになるかもしれないと、第一の皇子のご生母の女御は疑いをもつていた。この人は帝のもつともお若い時に入内した最初の女御であつた。この女御へすまないという気もじゅうぶんにもつておいでになつた。帝の深い愛を信じながら、悪くいう者と、何かの欠点を探し出そうとする者ばかりの宮中

に、病身な、そして無力な家を背景として、いる心細い更衣は、愛されれば愛されるほど苦しみがふえるふうであった。

住んでゐる御殿は御所の中の東北のすみのような桐壺であつた。いくつかの女御や更衣たちの御殿の廊を通い路にして帝がしばしばそこへおいでになり、宿直をする更衣があがりさがりして行く桐壺であつたから、しじゅうながめていねばならぬ御殿の住人たちの恨みが量んでいくのも道理といわねばならない。召されることがあまりつづくころは、打櫓とか通い廊下のある戸口とかに意地の悪いしかけがされて、送り迎えをする女房たちの着物の裾が一度で痛んでしまふようなことがあつたりする。またあるときは、どうしてもそこを通らねばならぬ廊下の戸に錠がさされてあつたり、そこが通れねばこちらを行くはずの御殿の人どうしがいい合せて、桐壺の更衣の通り路をなくして辱しめるようなことなどもしばしばあつた。数えきれぬほどの苦しみを受けて、更衣が心を滅入らせているのをごらんになると、帝はいっそう憐れを多くお加えになつて、清涼殿につづいた後涼殿に住んでゐた更衣を外へお移しになつて、桐壺の更衣へ休息室としてお与えになつた。移された人の恨みはどの後宮よりもまた深くなつた。

第二の皇子が三歳におなりになつた時に袴着の式がおこなわれた。前にあつた第一の皇子のその式に劣らぬような派手な準備の費用が宮廷から支出された。それにつけても世間はいろいろに批評をしたが、成長されるこの皇子の美貌と聡明さとが類のないものであつたから、だれも皇子を悪く思うことはできなかった。有識者はこの天才的な美しい小皇子を見て、こんな人も人間世界に生れてくるものとみな驚いてゐた。その年の夏のことである。御息所（皇子女の生母になつた更衣はこう呼ばれるのである）はちょっとした病氣になつて、実家へさがらうとしたが、帝はおゆるしにならなかつた。どこからだが悪いといふことはこの人の常のことになつてゐたから、帝はそれほどお驚きにならずに、

「もうしばらく御所で養生をしてみてもからにするがよい」

といつておいでになるうちにしだいに悪くなつて、そうなるからほんの五六日のうちに病は重体になつた。母の未亡人は泣く泣くお暇を願つて帰宅させることにした。こんな場合にはまたどんな呪詛がおこなわれるかもしれない、皇子にまでわざわいをおよぼしてはとの心づかいから、皇子だけを宮中にとどめて、目立たぬように御息所だけが退出するのであつた。このうへとどめることは不可能であると帝は思召して、更衣が出かけて行くところを見送ることのできぬご尊貴の御身のものたりなさを堪えがたく悲しんでおいでになつた。

はなやかな顔だちの美人がひじょうに瘦せてしまつて、心の中には帝とお別れして行く無限の悲しみがあつたが、口へは何も出してゐることのできないのがこの人の性質である。あるかないかに弱つてゐるのをごらんになると、帝は過去も未来もまっ暗になつた気があそばさるのであつた。泣く泣くいろいろなたのもしい将来の約束をあそばされても、更衣はお返辞もできないのである。目つきもよほどだるそうでも、平生からなよなよとした人がいつそ弱々しいふうになつて寝てゐるのであつたから、これはどうなることであらうという不安が大御心を襲うた。更衣が宮中から輦車（こしんしゃ）で出てよいご許可の宣旨（せんし）を役人へお下しになつたりあそばされても、また病室へお帰りになると、今行くといふことをおゆるしにならない。

「死の旅にも同時に出るのがわれわれ二人であるとあなたも約束したのだから、私を置いて家へ行つてしまふことはできないはずだ」と、帝がおいいになると、そのお心もちのよくわかる女も、ひじょうに悲しそうにお顔を見て、

「限りとして別るる道の悲しきに

いかまほしきは命なりけり

死がそれほど私に迫つてきておりませんのでしたら」

これだけのことを息も絶え絶えにいつて、なお帝においいしたいことがありそうであるが、まったく気力はなくなつてしまつた。死ぬのであつたらこのまま自分のそばで死なせたいと帝は思召したが、今日

から始めるはずの祈禱も高僧たちがうけたまわっていて、それもぜひ今夜から始めねばなりませぬというようなことも申しあげて方々から更衣の退出をうながすので、別れがたく思召しながらお帰しになった。

帝は、お胸が悲しみでいっぱいになって、お眠りになることが困難であった。帰った更衣の家へお出しになる尋ねの使いはすぐ帰って来るはずであるが、それすら返辞を聞くことが待ちどおしいであろうと仰せられた帝であるのに、お使いは、

「夜半過ぎにお卒去になりました」

といって、故大納言家の人たちの泣き騒いでいるのを見ると、力が落ちてそのまま御所へ帰って来た。

更衣の死をお聞きになった帝のお悲しみは非常で、そのまま引籠っておいでになった。その中でも忘れがたみの皇子はそばへ置いておきたく思召したが、母の忌服中の皇子が、けがれのやかましい宮中においてになる例などはないので、更衣の実家へ退出されることになった。皇子はどんな大事があったともお知りにならず、侍女たちが泣き騒ぎ、帝のお顔にも涙が流れてばかりいるのだけをふしぎに思いになるふうであった。父子の別れというようなことはなんでもない場合でも悲しいものであるから、この時の帝のお心もほどお気の毒なものではなかった。

どんなに惜しい人でも、遺骸は遺骸として扱われねばならぬ葬儀がおこなわれることになって、母の未亡人は遺骸と同時に火葬の煙になりたいと泣き焦がれていた。そして葬送の女房の車にしていって望んでいっしょに乗って愛宕の野にいかめしく設けられた式場へついた時の未亡人の心はどんなに悲しかったであらう。

「死んだ人を見ながら、やはり生きている人のように思われてならない私の迷いをさますために行く必要があります」

と賢そうにいていたが、車から落ちてしまいそうに泣くので、こんなことになるのを恐れていたと女房たちは思った。

宮中からお使いが葬場へ来た。更衣に三位を贈られたのである。勅使がその宣命を読んだ時はど未亡人にとって悲しいことはなかった。三位は女御に相当する位階である。生きていた日に女御ともい合せなかったことが帝には残り多く思召されて贈位をたまわったのである。

こんなことででも後宮のある人々は反感をもった。同情のある人は故人の美しき、性格のなだらかさなどで憎むことのできなかった人である。今になって桐壺の更衣の真価を思い出していた。あまりにひどい殊籠ぶりであったから、その当時は嫉妬を感じたのであるとそれらの人は以前のことを思っていた。やさしい同情深い女性であったのを、帝つきの女官たちはみな恋しがついていた。「なくてぞ人は悲しかりける」とは、こうした場合のことであらうと見えた。時は人の悲しみにかかわらずもなく過ぎて、七日七日の仏事がつきつきにおこなわれる、そのたびに帝からはお用いの品々が下された。

愛人の死んだのちの日はたつていくにしたがつて、どうしようもない寂しさばかりを帝はお覚えになるのであって、女御、更衣を宿直に召されることも絶えてしまった。ただ涙の中のご朝夕であつて、拝見する人までが湿っぽい心になる秋であった。

「死んでからまでも人の気を悪くさせるご寵愛ぶりね」

などといって、右大臣の娘の弘徽殿の女御などは今さえも嫉妬を捨てなかった。帝は一の皇子をごろんになつても更衣の忘れがたみの皇子の恋しさばかりをお覚えになつて、親しい女官や、ご自身のお乳母などをその家へおつかわしになつて若宮のようすを報告させておいでになつた。

野分ふうに風が出て肌寒の覚えられる日の夕方に、平生よりもいっそう故人が思われになつて、勝負の命婦という人を使いとしてお出しになった。夕夜の美しい時刻に命婦を出かけさせて、そのまま深いもの思いをしておいでになった。以前にこうした月夜は音楽者の遊びがおこなわれて、更衣はその一人に加わってすぐれた音楽者の素質を見せた。またそんな夜に詠む歌なども平凡ではなかった。彼女の幻

は帝のお目に立ち添ってすこしも消えない。しかしながら、どんなに濃い幻でも瞬間の現実の価値はないのである。

命婦は故大納言家について車が門から中へ引き入れられた利那から、もういいような寂しさが味わわれた。未亡人の家であるが、一人娘のために住居の外見などにもみすばらしさがないようにと、つばな体裁を保って暮らしていたのであるが、子を失った女主人の無明の日はつづくようになってからは、しばらくのうちに庭の雑草が行儀悪く高くなった。またこのごろの野分の風でいっそう邸内が荒れた気のするのであったが、月光だけは伸びた草にもさわらずさしこんだその南向きの座敷に命婦を招じて出て来た女主人は、すぐにものがないほどまた悲しみに胸をいっぱいしていた。

「娘を死なせました母親がよくも生きていられたものというように、運命がただ恨めしゅうございますのに、こうしたお使いがあれば家へおいでくださると、またいっそう自分がはばかりてなりません」といって、実際堪えられないだろうと思われるほど泣く。

「こちらへあがりますと、またいっそうお気の毒になりまして、魂も消えるようでございますと、先日典侍は陛下へ申しあげていらつしやいましたが、私のような浅薄な人間でもほんとうに悲しさが身にします」と

といってから、しばらくして命婦は帝の仰せを伝えた。

『当分夢ではないであらうかというようにばかり思われましたが、ようやくおちつくとともに、どうしようもない悲しみを感じるようになりました。こんな時はどうすればいいのか、せめて話し合う人があればいいのですが、それありません。目立たぬようにして時々御所へ来られてはどうですか。若宮を長く見ずにいて気がかりでならないし、また若宮も悲しんでおられる人ばかりの中にいてかわいそうですから、彼を早く宮中へ入れることにして、あなたもいっしょにおいでなさい』

「こういうお言葉ですが、涙にむせかえておいでになって、しかも

人に弱さを見せまいとご遠慮をなさらないでもないごようすがお気の毒で、ただ、おおよそだけをうけたまわっただけで参りました」といって、また帝のお言づてのはかのご消息を渡した。

「涙でこのごろは目も暗くなっておりますが、過分な、かたじけない仰せを光明にいたしました」

未亡人は、お文を拝見するのであった。

時がたてばすこしは寂しさもまぎれるであろうかと、そんなことをたのみにして日を送っていた、日がたてばたつほど悲しみの深くなるのは困ったことである。どうしているかとばかり思いやっている小児も、そろった両親に育てられる幸福を失ったものであるから、子を失ったあなたに、せめてその子のかわりとしてめんどうを見てやってくれることをたのむ。

などこまごまと書いておありになった。

宮城野の露吹き結ぶ風の音に

小萩が上を思ひこそやれ

という御歌もあったが、未亡人は湧き出す涙がさまたげて明らかに拝見することができなかった。

「長生きをするからこうした悲しい目にも会うのだと、それが世間の人の前に私をきまりわるくさせることなのでございますから、まして御所へ時々あがることなどは思いもよらぬことでございます。もったいない仰せをうかがっているのですが、私が伺候いたしますことは今後も実行はできないでございます。若宮様は、やはり御父子の情というものが本能にありますものと見えて、御所へ早くおはいりになりたいごようすをお見せになりますから、私はご道理だとおかしいそうに思っておりますということなどは、表向きの奏上でなしに何かのおついでに申しあげてくださいませ。良人も早く亡くしますし、娘も死なせてしまいましたような不幸づくめの私がごいっしょにおりますことは、若宮のために縁起のよろしくないことと恐れ入っております」などといった。そのうち若宮も、もうおやすみになった。

「またお目ざめになりますのをお待ちして、若宮にお目にかかりまして、くわしくごようすも陛下へご報告したいのでございますが、使いの私の帰りますのをお待ちかねでもいらつしやいますでしようから、それでは、あまりおそくなるでございましょう」といって命婦は帰りを急いだ。

「子を失くしました母親の心の、悲しい暗さがせめて一部分でも晴れますほどの話をさせていたきたいのですから、公のお使いでなく、気楽なお氣もちでお休みがてら、またお立ち寄りください。以前はうれしいことでよくお使いにおいでくださいましたのですが、こんな悲しい勅使であなただけをお迎えするとはなんということでしょう。かえすがえす運命が私に長生きさせるのが苦しゅうございます。故人のことを申せば、生れました時から親たちに輝かしい未来の望みをもたせました子で、父の大納言はいよいよ危篤になりますまで、この人を宮中へさしあげようと自分の思ったことをぜひ実現させてくれ、自分が死んだからといって今までの考えを捨てるようなことをしてはならないと、何度も何度も遺言いたしました、たしかな後援者なしの宮仕えは、かえって娘を不幸にするようなものではないだろうかとも思いますが、私にいたしましたは、ただ遺言を守りたいばかりに陛下へさしあげましたが、過分な寵愛を受けまして、そのお光でみすばらしさも隠していたで、娘はお仕えしていたのでしようが、みなさんのご嫉妬の積っていくのが重荷になりました、寿命で死んだとは思えませんような死に方をいたしましたのですから、陛下のあまりに深いご愛情がかえって恨めしいように、盲目的な母の愛から私は思いもいたします」

こんな話をまだ全部もいわないで未亡人は涙でむせかえってしまったりしているうちに、ますます深更になつた。

「それは陛下も仰せになります。自分の心でありながら、あまりに穏やかでないほどの愛しようをしたのも前生の約束で長くはいっしょにいられぬ二人であることを意識せずに感じていたのだ。自分らは恨め

しい因縁でつながれていたのだ。自分は即位してから、だれのためにも苦痛を与えるようなことはしなかったという自信をもっていたが、あの人によって負つてならぬ女の恨みを負い、ついには何よりもたいせつなものを失つて、悲しみにくれて以前よりもっと愚劣な者になっているのを思うと、自分らの前生の約束はどんなものであったか知りたいとお話になって、湿っぽいごようすばかりをお見せになっています」

「どちらも話すことにきりが無い。命婦は泣く泣く、
「もうひじょうにおそいようですから、復命は今晩のうちにいたしたいとぞんじますから」

「いって、帰る仕度をした。落ちぎわに近い月夜の空が澄みきった中を涼しい風が吹き、人の悲しみをうながすような虫の音がするのであるから帰りにくい。

鈴虫の声の限りを尽くしても

長き夜飽かず降る涙かな

車に乗ろうとして命婦はこんな歌を口ずさんだ。

「いとどしく虫の音しげき浅茅生に

露置き添ふる雲の上人

かえってご訪問が恨めしいと申しあげたいほです」

と未亡人は女房にいわせた。意匠を凝らせた贈物などする場合でなかったから、故人の形身ということにして、唐衣と裳のひとつろえに、髪あげの用具のはいった箱を添えて贈った。

若い女房たちの更衣の死を悲しむのはむろんであるが、宮中住居をしながらいて、寂しくものたらず思われることが多く、おやさしい帝のごようすを思ったりして、若宮が早く御所へお帰りになるようにとうながすのであるが、不幸な自分がごいっしょにあがっていることも、また世間に非難の材料を与えるようなものであらうし、またそれかといつて若宮とお別れしている苦痛にも堪えきれぬ自信がないと未亡人は思うので、けっきょく若宮の宮中入りは実行性に乏しかった。

御所へ帰った命婦は、まだ宵のままでご寢室へはいっておいでにならない帝を気の毒に思つた。中庭の秋の花の盛りなのを愛していらっしゃるふうをあそばして、凡庸でない女房四五人をおそばに置いて話をしておいでになるのであつた。このごろしじゅう帝のごらんになるものは、玄宗皇帝と楊貴妃の恋を題材にした白楽天の長恨歌を、亭子院が絵にあそばして、伊勢や貫之に歌をお詠ませになった巻物で、そのほか日本文学でも、支那のでも、愛人に別れた人の悲しみが歌われたものばかりを帝はお読みになった。帝は命婦にこまごまと大納言家のようすをお聞きになった。身にしむ思いを得てきたことを命婦は外へ声をはばかりながら申しあげた。未亡人のご返書を帝はごらんになる。

もったいなさをどうしまつたしてよろしゅうございますやら。こうした仰せをうけたまわりまして、愚か者はただ悲しい悲しいとばかり思われるのでございます。

荒き風防ぎし蔭の枯れしより

小萩が上ぞしづ心無き

というような、歌の価値の疑わしいようなものも書かれてあるが、悲しみのためにおつかない心で詠んでいるのであるからと寛大にざらんになった。帝は、ある程度まではおさえていねばならぬ悲しみであると思召すが、それがご困難であるらしい。はじめて桐壺の更衣のあがつて来たころのことなどまでが、お心の表面に浮びあがつてきてはいっそう暗い悲しみに帝をお誘ひした。その当時しばらく別れているということさえも自分にはつらかったのに、こうして一人でも生きていられるものであると思うと、自分は偽り者のような気がすると帝はお思いになった。

「死んだ大納言の遺言を苦勞して実行した未亡人へのむくい、更衣を後宮の一段高い位置にすることだ、そうしたいと自分はいつも思っていたが、何もかもみな夢になった」と
とおいいになって、未亡人にかぎらない同情をしておいでになった。

「しかし、あの人はいなくても若宮が天子にでもなる日がくれば、故人に後の位を贈ることもできる。それまで生きていたいとの夫人は思っているだらう」

などという仰せがあつた。命婦は贈られた物を御前へ並べた。これが唐の幻術師が他界の楊貴妃に会つて得てきた玉の簪であつたらと、帝はかないこともお思いになった。

尋ね行くまぼろしもがなつてにても

魂のありかをそこ知るべく

絵で見る楊貴妃はどんなに名手の描いたものでも、絵における表現はかぎりがあつて、それほどのすぐれた顔ももっていない。太液池の蓮花にも、未央宮の柳の趣きにもその人は似ていたであらうが、また唐の服装は華美ではあつたであらうが、更衣のもつた柔らかな美、艶な姿態をそれに思いくらべてごらんになると、これは花の色にも鳥の声にもたとえられぬ最上のものであつた。お二人のあいだはいつも、天にあつては比翼の鳥、地に生れれば連理の枝という言葉で永久の愛を誓つておいでになったが、運命はその一人に早く死を与えてしまった。秋風の音にも虫の声にも帝が悲しみを覚えておいでになると、弘徽殿の女御はもう久しく夜の御殿の宿直にもおあがりせずいて、今夜の月明にふけるまでその御殿で音楽の合奏をさせているのを帝は不愉快に思召した。このごろの帝のお心もちをよく知っている殿上役人や帝づきの女房などもみな、弘徽殿の楽音に反感をもつた。負けぎらいな性質の人で更衣の死などは眼中にないというふうをわざと見せていたのであつた。

月も落ちてしまった。

雲の上も涙にくるる秋の月

いかですむらん浅茅生の宿

命婦がご報告した故人の家のことを、なお帝は想像あそばしながら起きておいでになった。

右近衛府の土官が宿直者の名を披露するのをもつてすれば午前二時

になったのであろう。人目をおはばかりになってご寢室へおはいりになつてからも、安眠を得たもうことはできなかった。

朝のお目ざめにもまた、夜明けも知らずに語り合った昔のご追憶がお心を占めて、寵姫の在った日も亡いあとも朝の政務はお怠りになることになる。お食欲もない。簡単なご朝食はしるだけおとりになるが、帝王のご朝食として用意される大床子のお料理などは召しあがらないものになつていた。それには殿上役人のお給仕がつくのであるが、それらの人はみなこの状態を嘆いていた。すべて側近する人は男女の別なしに困つたことであると嘆いた。よくよく深い前生のご縁で、その当時は世の非難も後宮の恨みの声もお耳にはとまらず、その人に関することではだけは正しい判断を失つておしまいになり、また死んだあとではこうして悲しみに沈んでおいでになつて政務も何もお顧みにならない、国家のためによろしくないことであるといつて、支那の歴朝の例までも引き出していう人もあつた。

幾月かのちに第二の皇子が宮中へおはいりになつた。ごく小さいつきですら、この世のものとはお見えにならぬご美貌のそなわつた方であつたが、今はまた、いっそ輝くほどのものに見えた。その翌年、立太子のことがあつた。帝の思召は第二の皇子にあつたが、だれという後見の~~影~~がなく、また、だれもが肯定しないことであるのを悟つておいでになつて、かえつてその地位は若宮の前途を危険にするものであるとお思ひになつて、ご心中をだれにもお漏しにならなかつた。東宮におなりになつたのは第一親王である。この結果を見て、あれほどの御愛子でもやはり太子にはおきにならないのだと世間もい、弘徽殿の女御も安心した。そのときから宮の外祖母の未亡人は落胆して更衣のいる世界へ行くことのほかに希望もないといつて一心にみ仏の来迎を求めて、とうとう亡くなつた。帝はまた若宮が祖母を失われたことでお悲しみになつた。これは皇子が六歳のときのことであるから、今度は母の更衣の死に会つたときとは違ひ、皇子は祖母の死を知つてお悲しみになつた。今までしじゅうお世話を申していた

宮とお別れするのが悲しい、ということばかりを未亡人はいつて死んだ。

それから若宮は、もう宮中にばかりおいでになることになつた。七歳の時に書初めの式がおこなわれて学問をお始めになつたが、皇子の類のない聰明さに帝はお驚きになることが多かった。

「もうこの子をだれも憎むことができないでしょう。母親のないという点だけでもかわいがつておやいなさい」

と帝はおいいになつて、弘徽殿へ昼間おいでになるときもいっしょにおつれになつたりして、そのまま御簾の中にもお入れになつた。どんな強さ一方の武士だつても仇敵だつても、この人を見ては笑みが自然に湧くであらうと思われる美しい少童^{しょうどう}でありになつたから、女御も愛を覚えずにはいられなかつた。この女御は東宮のほかに姫君をお二人お生みしていたが、その方々よりも第二の皇子の方がおきれいであつた。姫宮方もお隠れにならないで賢い遊び相手としてお扱いになつた。学問はもとより、音楽の才も豊かであつた。いえば不自然に聞えるほどの天才児であつた。

その時分に高麗人が来朝した中に、じょうずな人相見の者がまじつていた。帝はそれをお聞きになつたが、宮中へお呼びになることは亭子院のお誂めがあつておきにならず、だれにも秘密にして皇子のお世話役のようになつて右大弁の子のように思わせて、皇子を外人の旅宿する鴻臚館へおやりになつた。

相人は不審そうに頭をたびたび傾けた。

「国の親になつて最上の位を得る人相であつて、さてそれでよいかと拝見すると、そんなことはこの人の幸福な道でない。国家の柱石になつて帝王の補佐をする人として見てもまた違ふようです」

といった。弁も漢学をよくできる官人であつたから、筆紙をもつて高麗人との問答にはおもしろいものがあつた。詩の贈答もして高麗人はもう日本の旅が終らうとする期に臨んで珍しい高貴の相をもつ人に会つたことは、いまさらにこの国を離れがたくすることであるとい

うような意味の作をした。若宮も送別の意味をお作りになったが、その詩をひじょうにほめて種々なその国の贈物をしたりした。

朝廷からも高麗の相人へ多くの下賜品があった。その評判から東宮の外戚の右大臣などは第二の皇子と高麗の相人との関係に疑いをもった。好遇された点が附に落ちないのである。聰明な帝は高麗人の言葉以前に皇子の将来を見通して、幸福な道を選ぼうとしておいでになった。それで、ほとんど同じことを占った相人に価値をお認めになったのである。四品以下の無品親王などで、心細い皇族としてこの子を置きたくない、自分の代もいつ終るかしれぬのであるから、将来にもっともたのもしい位置をこの子に設けておいてやらねばならぬ。臣下の列に入れて国家の柱石たらしめることがいちばんよいと、こうお決めにあって、以前にもましていろいろの勉強をおさせになった。大きな天才らしい点のあらわれてくるのをごらんになると、人臣にするのが惜しいというお心になるのであったが、親王にすれば天子にかわろうとする野心をもつような疑いを当然受けそうにお思われになった。じょうずな運命占いをする者にお尋ねになっても同じような答申をするので、元服後は源姓をたまわって源氏の某^{なにかし}としようとお決めた。

年月がたつても帝は桐壺の更衣との死別の悲しみをお忘れになることができなかった。慰みになるかと思召して美しい評判のある人などを後宮へ召されることもあったが、結果はこの世界には故更衣の美に準ずるだけの人もないのであるという失望をお味わいになっただけである。そうしたころ、先帝(帝の従兄^{とと}兄^{あに}は叔父^{おじ}君)の第四の内親王でお美しいことをだれもいう方で、母君のお后^{おごう}がだいじにしておいでになる方をことを、帝のおそばに奉仕している典侍^{てんじ}は先帝の宮廷にいた人で、後の宮へも親しく出入りしていて、内親王のご幼少時代をも知り、現在でもほのかにお顔を拝見する機会を多く得ていたから、帝へお話しした。

「お亡くれになりました御息所^{みよしよ}のご容貌に似た方を、三代も宮廷にお

りました私すらまだ見たことがございませんでしたのに、後の宮様の内親王様だけがあの方に似ていらつしやいますことにはじめて気がつきました。ひじょうにお美しい方でございます」

もしそんなことがあったらと大御心が動いて、先帝の後の宮へ姫宮のご入内のことを懇切にお申し入れになった。お后は、そんな恐ろしいこと、東宮のお母様の女御が並ばず強い性格で、桐壺の更衣が露骨ないじめ方をされた例もあるのに、と思召して話はそのままになっていた。そのうちお后もお崩れ^{おこた}になった。姫宮がお一人で暮しておいでになるのを帝はお聞きになって、

「女御というよりも自分の娘たちの内親王と同じように思つて世話がしたい」

と、なおも熱心に入内をお勧めになった。こうしておいでになって、母宮のことばかりを思つておいでになるよりは、宮中のご生活にお歸りになったら若いお心の慰みにもなろうと、おつきの女房やお世話係の者がいい、兄君の兵部卿親王もその説にご賛成になって、それで先帝の第四の内親王は当帝の女御におなりになった。御殿は藤壺である。典侍の話のとおり、姫宮の容貌も身のおとりなしもふしぎなまで桐壺の更衣に似ておいでになった。この方はご身分に非の打ちどころがない。すべてごりっぱなものであって、だれも貶める言葉を知らなかった。桐壺の更衣は身分とご寵愛とに比例のとれぬところがあった。お痛手が新女御の宮で癒されたともいえないであらうが、自然に昔は昔として忘れられていくようになり、帝にまた楽しいご生活が帰ってきた。あれほどのことも、やはり永久不変でありえない人間の恋であつたのであらう。

源氏の君(まだ源姓にはなつておられない皇子であるが、やがてそ
うおなりになる方であるから筆者はこう書く)はいつも帝のおそばを
お離れしないのであるから、自然どの女御の御殿へもしたがって行
く。帝がことしばしばおいでになる御殿は藤壺であつて、お供して
源氏のしばしば行く御殿は藤壺である。宮もお慣れになつて隠れてば

かりはおいでにならなかった。どの後宮でも容貌の自信がなくて入内した者はないのであるから、みなそれぞれの美をそなえた人たちであったが、もうみなだいぶ年がいつていた。その中へ若いお美しい藤壺の宮が出現されて、その方はひじょうにはずかしがって、なるべく顔を見せぬようとなすつても、自然に源氏の君が見ることになる場合もあった。母の更衣は面影も覚えていないが、よく似ておいでになると典侍がいったので、子ども心に母に似た人として恋しく、いつも藤壺へ行きたくなって、あの方と親しくなりたいという望みが心にあった。帝には二人とも最愛の妃であり、最愛の御子であった。

「彼を愛しておやりなさい。ふしぎなほど、あなたとこの子の母とは似ているのです。失礼だと思わずにかわいがってやってください。この子の目つき顔つきがまたよく母に似ていますから、この子とあなたとを母と子と見てもよい気がします」

など、帝がおとりなしになると、子ども心にも花や紅葉の美しい枝は、まずこの宮へさしあげたい、自分の好意を受けていただきたいというこんな態度をとるようになった。現在の弘徽殿の女御の嫉妬の対象は藤壺の宮であったから、その方へ好意を寄せる源氏に、一時忘れられていた旧怨も再燃して憎しみをもちつことになった。女御が傲慢にし、はめられてもおいでになる幼内親王方の美を遠く超えた源氏の美貌を、世間の人はいいあらわすために光君といった。女御として藤壺の宮のご寵愛が並びないものであったから対句のように作って、輝く日の宮と一方を申ししていた。

源氏の君の美しい童形をいつまでも変えたくないように帝は思召したのであったが、いよいよ十二の歳に元服をおさせになることになった。その式の準備もなにも帝ご自身でお指図になった。前に東宮のご元服の式を紫宸殿であげられたときの派手やかさに落さず、その日、官人たちが各階級別々にさずかる饗宴の仕度を内蔵寮、穀倉院などでするのは、つまり公式の仕度で、それではじゅうぶんでないと思召して、特に仰せがあって、それらも華麗をきわめたものにされた。

清凉殿は東面しているが、お庭の前のお座敷に玉座の椅子がすえられ、元服される皇子の席、加冠役の大臣の席がそのお前にできていた。午後四時に源氏の君が参った。上で二つに分けて耳のところで輪にした童形の礼髪を結った源氏の顔つき、少年の美、これを永久に保存しておくことが不可能なのであろうかと惜しまれた。理髪の役は大蔵卿である、美しい髪を短く切るのを惜しく思うふうであった。帝は御息所がこの式を見たならばと、昔をお思い出しになることによつて堪えがなくなる悲しみをおさえておいでになった。加冠が終つて、いったん休息所にさがり、そこで源氏は服をかえて庭上の拝をした。参列の諸員はみな小さい大宮人の美に感激の涙をこぼしていた。帝はましてご自制なされがたいご感情があつた。藤壺の宮をお得になつて以来、まぎれておいでになることもあつた昔の哀愁が今一度にお胸へ帰ってきたのである。まだ小さくて、おとなの頭の形になることは、その人の美を損じさせはしないかというご懸念もおありになったのであるが、源氏の君には今驚かれるほどの新彩が加わつて見えた。加冠の大臣には夫人の内親王とのあいだに生れた令嬢があつた。東宮から後宮にとお望みになったのをお受けせずに、お返辞を躊躇していたのは、初めから源氏の君の配偶者に擬していたからである。大臣は帝のご意向をもうかがつた。

「それでは元服したのちの彼を世話する人も要ることであるから、その人をいっしょにさせればよい」といふ仰せがあつたから、大臣はその実現を期していた。

今日の侍所になつて座敷で開かれた酒宴に、親王方の次の席へ源氏はついた。娘の件を大臣がほのめかしても、きわめて若い源氏はなんとも返辞することができないのであつた。帝のお居間の方から仰せによつて内侍が大臣を呼びに来たので、大臣はすぐに御前へ行つた。加冠役としての下賜品はおそばの命婦がとりついだ。白い大柱に帝のお召料のお服が一襲で、これは昔から定まった品である。酒杯をたまわるときに、次の歌を仰せられた。

いときなき初元結ひに長き世を

契る心は結びこめつや

大臣の女との結婚にまでいいおよぼしになった御製は大臣を驚かした。

結びつる心も深き元結ひに

濃き紫の色しあせずば

と返歌を奏上してから大臣は、清凉殿の正面の階段をさがって拝礼をした。左馬寮のお馬と蔵人所の鷹をその時にたまわった。そのあとで諸員が階前に出て、官等にしたがってそれぞれの下賜品を得た。この日のご饗宴の席の折詰のお料理、籠詰めの菓子などは、みな右大弁がご命令によって作ったものであった。一般の官吏にたもう弁当の数、一般に下賜される絹を入れた箱の多かったことは、東宮のご元服のとき以上であった。

その夜、源氏の君は左大臣家へ婿になって行った。この儀式にも善美は尽されたのである。高貴な美少年の婿を大臣はかわいく思った。姫君の方がすこし年上であつたから、年下の少年に配されたことを、不似合いにはずかしいことに思っていた。この大臣は大きい勢力をもつたうえに、姫君の母の夫人は帝のご同胞であつたから、あくまでもはなやかな家であるところへ、今度また帝のご愛子の源氏を婿に迎えたのであるから、東宮の外祖父で未来の関白と思われる右大臣の勢力は比較にならぬほど気押されていた。左大臣は何人かの妻妾から生れた子どもを幾人ももっていた。内親王腹のは今蔵人少将であつて年少の美しい貴公子であるのを、左右大臣の仲はよくないものであるが、その蔵人少将をよその者に見ていることができず、だいにしている四女の婿にした。これも左大臣が源氏の君をたいせつがるのに劣らず、右大臣からだいに婿君としてかしくかれていたのはよい一対の麗わしいことであつた。

源氏の君は帝がおそばを離しにくくあそばすので、ゆっくりと妻の家に行っていることもできなかった。源氏の心には藤壺の宮の美が最

上のものに思われて、あのような人を自分も妻にしたい、宮のような女性はまだ一人とないであらう、左大臣の令嬢はだいにされて育つた美しい貴族の娘とだけはうなずかれるがと、こんなふうに思われて單純な少年の心には藤壺の宮のことばかりが恋しくて苦しいほどであつた。元服後の源氏は、もう藤壺の御殿の御簾の中へは入っていたけなかつた。琴や笛の音の中に、その方がおひきになるもの声を求めるとか、今はもう物越しにより聞かれないほのかなお声を聞くとかが、せめてもの慰めになって、宮中の宿直ばかりが好きだつた。五六日御所にて、二三日大臣家へ行くなど絶え絶えの通い方を、まだ少年期であるからと見て大臣はとがめようとも思わず、相も変らず婿君のかしずき騒ぎをしていた。新夫婦づきの女房は、ことにすぐれた者をもつてしたり、気に入るような遊びを催したり、一所懸命である。御所では母の更衣のものと桐壺を源氏の宿直所にお与えになって、御息所に侍っていた女房をそのまま使わせておいでになつた。更衣の家の方は修理の役所、内匠寮などへ帝がお命じになつて、ひじょうにりっぱなものに改築されたのである。もとかから築山のあるよい庭のついた家であつたが、池なども今度はずっと広くされた。二条の院はこれである。源氏はこんな気に入った家に自分の理想どおりの妻と暮すことができたと思つて、しじゅう嘆息をしていた。

光の君という名は、前に鴻臚館へ来た高麗人が、源氏の美貌と天才をほめてつけた名だと、そのころいわれたそうである。